



みろくの風

Vol 70



伝統舞踊の披露 (日本でのミャンマー教師研修事業にて)

- contents -

目次	●ミャンマー教師・日本研修(写真).....	2・3
	●ミャンマー教師・日本研修(感想文).....	4・5
	●チベットその苦難の歴史.....	6
	●チベット難民支援活動紹介.....	7
	●お知らせ.....	8



アジアの子供たちに「未来」を!

ご寄付のお願い

れんげ国際ボランティア会はNGO(またはNPO)と呼ばれる民間の国際協力団体です。ODA(政府開発援助)とは異なり資金力がありません。しかし資金的には小規模であっても、本当に必要な人々に、心こもった支援ができるよう努力を致しております。その努力が実り、活動に関しては、外務省や現地の人々から高い評価を頂いております(認定NPOとしても認定)。今後もアジアの人々が日本に対して親近感を抱き、友好関係を築けるような有効な支援事業を続けてまいりたいと考えています。何卒、活動へのご理解を頂き、活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

机・椅子をプレゼント

(ミャンマー農村)

民主化の進むミャンマーで学校建設を進めています(今年度で81校を建設)。その際の机・椅子の購入費となります。

5セット(5人分)で10,000円



本をプレゼント

(チベット難民)

チベット地方(中国チベット自治区や、青海省、四川省など)からインドに逃れている難民の子供たちにチベット語の物語や小説、副読本などをプレゼント。

10冊で5,000円



おまかせ募金

特に寄付金の用途を指定せず、当会に一任して頂ける場合の募金です。

おいくらでも

会の維持運営費

各種ボランティア活動を行うためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所維持費(本部や現地)、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えするための重要な募金が維持会費です。

一口：年間 5,000円

振込用紙は毎号お入れしています

これは事務作業の手間を省くためと、「思い立ったときにいつでも振り込みできるように、いつも入れておいて欲しい」という要望があるためです。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方はご処分をお願い致します。

第70号 2019(令和元年)10月

季刊/みろくの風(れんげ国際ボランティア会会報)

発行人/川原英照

住所/〒865-0065 熊本県玉名市築地2288

電話/0968(73)4851

◇各種お問い合わせ◇

(認定NPO法人)

れんげ国際ボランティア会

http://reng.asia

e-mail artic@reng.asia

f@reng.artic



ミャンマーにはない体育の授業に興味津々



築山小学校訪問・最も興味をひかれた図書館運営



有明中訪問・先生や学生さんとの懇談では文化の違いにビックリ



給食の役割分担を自主的に淡々と行う児童たちに驚き!



交流会ではミャンマーの蹴鞠(チンロン)で大盛り上がり



中学生でこんなに上手に演奏するの!



口腔保健学科では歯科衛生の実践



九州看護福祉大学訪問・相互理解のワークショップ



ミャンマーではまだ遅れている環境教育を学びました(環境センターにて)



文化交流



民族舞踊をご披露



事業者のかたがたとの懇談会(玉名倫理法人会にて)



先進農業視察



森義臣先生講和・教師に最も必要なものは何かを教わりました



世界規模の造船工場に圧倒されました(ジャパンリユニテッド視察)



数年前に民主化されたミャンマー、行政の役割を勉強する良い機会となりました(市役所訪問)



玉名市長、教育長と共に

去る9月3日から10日までの8日間、イラワジ管区の先生達8名を日本にお連れし、小学校、中学校を始めとする教育機関、及び東部環境センター、造船所などの社会見学を行いました。

さてご承知の通り、れんげ国際ボランティア会(ARTIC)は2013年度より7年間、ミャンマー・イラワジ管区において学校建設や地域開発事業を行ってきました。しかし、学校建設だけではミャンマーの教育環境の改

善や教育の質の向上に繋がらないことを実感し、2018年度より人材育成研修所を建設し、若い先生の意識改革と能力向上のための研修事業を実施しています。今回の日本での研修に参加された先生達は、過去4回のその研修の中から試験と面接で選ばれた優秀な8名の教師の皆さんです。

ミャンマーでは2016年よりスーチーさんが率いるNLDという政党の民主政権が発足しています。しかし、3年以上経過しても全く国が良くなっているという実感がありません。それは、軍事政権が終わりさえすればミャンマーは良くなるという信じられてきたままの努力もしてこなかったミャン

マーの一人一人に責任があると考えています。多くのミャンマー人は「権利は主張しますが責任は取りません。」これが今のミャンマーの姿です。

私が今のミャンマー社会で大きな問題と感じるのは、人々が嘘をつくことにあまり罪の意識を感じていないことです。悪いことも恥ずかしいこととも思っていない。これは先生でさえも同様です。にわかには信じがたいと思いますが、日本に行く先生を選抜する面接の際に、ある教師に「(ミャンマーでの)研修に参加する前と後では何が変わりましたか?」という質問に対し、「研修終了後一度も嘘をついていません。」という真面目な答えが返ってきました。

これは軍事政権時代の負の遺産であり、教育以前の問題です。洋の東西を問わず、社会が存在していくためには、基礎となるモラルや道徳心が必要です。ミャンマーが民主的な国家となり、国際社会の仲間入りをするためには規則を守る、約束や時間を守るということが

ミャンマー教師 日本研修 (in熊本)

(令和元年9月3日~9月10日)

ヤンゴン事務所 所長 平野喜幸



教室には丁寧なミャンマー語の歓迎文(九州看護福祉大学)

人にある責任があると考えています。多くのミャンマー人は「権利は主張しますが責任は取りません。」これが今のミャンマーの姿です。

私が今のミャンマー社会で大きな問題と感じるのは、人々が嘘をつくことにあまり罪の意識を感じていないことです。悪いことも恥ずかしいこととも思っていない。これは先生でさえも同様です。にわかには信じがたいと思いますが、日本に行く先生を選抜する面接の際に、ある教師に「(ミャンマーでの)研修に参加する前と後では何が変わりましたか?」という質問に対し、「研修終了後一度も嘘をついていません。」という真面目な答えが返ってきました。

これは軍事政権時代の負の遺産であり、教育以前の問題です。洋の東西を問わず、社会が存在していくためには、基礎となるモラルや道徳心が必要です。ミャンマーが民主的な国家となり、国際社会の仲間入りをするためには規則を守る、約束や時間を守るということが

をもう一度教育の現場から作り直していかねばなりません。昨年からの研修所を造り、定期的に人材育成研修を始めた最大の目的もそこにあります。さらに日本に視察研修に派遣する理由です。

ミャンマーに帰国後、日本研修に参加した先生方からは、日本では「一度も車のクラクションの音を聞かなかった」とか、「どこにもゴミが落ちていなかった」とか、驚きの声が上がっていました。また、小学校や中学校にある本の数、そしてそれを読んでいる生徒の数にも驚かれました。もちろん、先生達みんなが訪問の先々でのホスピタリティに感謝し、日本の大ファンとなったのは言うまでもありません。

今回の研修は、概ね目指していた目的を達成することができて無事に終了することが出来ました。受け入れて頂いた玉名市、玉名市教育委員会を始め、各学校や施設の皆様、ホームステイを受け入れてくださった家族の皆様、心より感謝申し上げます。



噴煙の上る阿蘇山をバックに少し心配そう

日本での研修を終えて

(前ページからの続き)

一週間という短い期間でしたが、ミャンマーの若い先生達が各所で見聞したことは、その多くが見たことも聞いたこともないような内容で、目からウロコが落ちるような感激でした。その知見はまさに乾いたスポンジが水を吸収するかのように自分のものとなったようです。感想の一部をご紹介します。



ピュースインプエ (Daw Phyu Sin Phwe) 24歳・女性教師

ピャボンタウンシップ、タマン高等学校で小学校の教師を務めている(下)ピュースインプエと申します。まずは今回のこの研修でお会いした先生の皆様に感謝の気持ちを伝えたいです。9月3日から10日まで「れんげ国際ボランティア会(A.R.T.I.C.)」のおかげで日本の教育を視察することが出来ました。その一週間で私が学んだこと、ミャンマーとの文化の違いなどを皆さんにお伝えし、分かち合いたいと思います。

日本に到着するとキラキラ輝く成田空港が空から見えました。まず、その空港で全日空(A.N.A.)に技能実習で来ているミャンマー人たちが会って意見交換をしました。彼らが日本に来る前と後の生活が変わったと分かりました。チームで働けるようになり、何でも計画して動くようになったということです。日本人の性格は時間に厳しく、お互い信頼関係



ウーティルウインウー (Htay Lwin Oo) 27歳・男性教師

私が本を読んで知っていた情報より日本はものすごく素晴らしいものでした。学校も考えていた以上に素敵でした。日本研修の一週間で学校を回って特に驚いたことは図書館のことです。本というものは正に知識や知恵、考え方を教えて成功に導く先生です。日本のように大きくはないですが、もちろんミャンマーの学校にも図書館があります。実際に回った学校でお伺いしたところでは本を読まない子供はいないということでした。本当に素晴らしいことです。

読書は自分が成長できるとてもいい趣味です。本を読まない人は成長出来ず、止まってしまう、読者はいつも進歩していきはります。木が生えるため根が大切であることと同じく、人は人にとってそして国にとって大事な存在です。子供は国の未来を背負うリーダーの役を務めているのでまず子供が良くなるとこそ良くなるのです。

日本は第二次世界大戦の敗戦後から今のようない先進国になるために、まず教育の面から変わったとARTICの平野さんの話がありました。良い教育制度は国の発展に繋がります。その教育を良くすることは先生たちに掛かっています。私たちが回った二つの学校の先生の皆さんに色々教えていただき良い経験になりました。ミャンマーに帰ったらこの研修から貰った貴重な経験を生かしたいと思っています。

私は教育に興味があり先生になりました。子供を育てることが好きです。しかしこれまで実際に私がやってきたのは学校の勉強だけでした。自分自身は音楽や芸術、運動などが

で約束を守ることや学びました。

翌日は玉名市長や教育長とお会いして懇談致しました。市として学校を建設することなど教育に関わることは行政が全て支えていることが分かりました。教室では生徒40人に教師1人が担任として寄り添います。また、生徒たちは中学校を卒業するまで学校に行く必要がある分かりました(私達の国では多くの子供が途中でドロップアウトします)。そして自分の町が本当に発展するためには町を愛し、規律を守ってリーダーの心を養わなければならないという市長の言葉に大変感銘を受けました。その話を聞いた瞬間に思ったのは自分の学校を良くするためには子供たちに教えることが好きになってもらえるように教えること、規律正しいリーダーが必要だということです。

地元の築山小学校を訪れると、音楽と体育以外、先生1人が全ての科目を教えるというところを知りました。また、日本の先生は教師のほかに販売(アルバイト)をするのと汚職で訴えられます。ミャンマーでも基本的にはアルバイトはダメですが、多くの先生がやっています。小学校では生徒達と一緒に給食を食べました。皆が分担してきちんと自分の役割を果たしていたのを見て驚きました。

少し障害のある子供たちには別に分かれて教えていました。その子たちのための課程があった、ちゃんと勉強出来る苦手で興味もなかったので、子供たちに教えることも出来ませんでした。日本に来て、日本の子供たちの音楽に関する才能にびっくりしました。誰でも生まれてから出来る子供はいないので、自分も一生懸命勉強して皆に教えられるように頑張りたいと思います。

私の学校は高等学校なので図書館がありません。しかし私は子供たちがより多くの本を読むようにうまく指導ができていませんでした。毎週末曜日は自分の担当なので毎回図書館に行きます。これからは子供たちともっと図書館へ行こうと考えています。

子供は何でも習うことが出来る森先生が仰いました(研修4日目)。しかしそれは先生が教えないと習うことも不可能です。子供は大人の気持ちを習い、いい加減に育てるといい加減になり、優しく育てれば優しくなりま

す。だからこそまずは私たちが教師がいい人格に変わらなければならぬと思います。このような機会を頂いた日本の皆様、誠にありがとうございました。そしてミャンマーのことをいい国になって欲しいという気持ちで、私達教師を日本研修に連れて来て頂いたARTICと平野さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。日本と日本人に対するお礼の気持ちは一生涯忘れません。皆様、本当にありがとうございました。



イラワジ管区教育事務所 副所長 ウーマンテインジョー (U Mahn Thein Kyaw)

まず私とイラワジ管区の教師8名を日本に研修する機会を作って頂いたアルティックの平野所長に感謝したいと思います。また、研

ように教えています。日本がこんなに圧倒的な先進国になったのは教育制度と先生たちに要因があると感じました。小学校の図書館にさえも120,000冊の本があることにとっても驚きました。学校それぞれに図書館があって、年齢によって本を分類したり、月に一番本を読む人は賞を得るというシステムも行っていているので子供の読書率が明らかにどんどん上がっているという感じが分かります。私の学校でも図書館活動が盛んになるように自分たちがもっと頑張らなければならないと思いました。

次に有明中学校に行ったら生徒達と話したら「何が面白いのか」という質問をしてみました。人はいまですか?という質問をしてみました。なんと誰もいないのはびっくりしました。「何故なら?」と思わないのですか?とさらに聞いてみると、「教師というのは正直で素直な人間でないといけないし、プレッシャーも多いと思うからです」という答えでした。日本の先生たちはプレッシャーがあっても、大変そうに見えなくても元気にふるまうところは私たちが見習うべきだと感じました。

ところで、ミャンマーも日本の課程と比べて始ど変わらないと感じました。英語力などではミャンマーの方が少し上だとも感じました。しかしながら何故ミャンマーの教育は日本のように発展しないのだろうかと思ひました。それは私自身がそうであるように、子供を教える時ミスや抜けている部分が多々あるように思います。子供は何を勉強しても全てを吸収することが出来ません。でも、教えることができないと習うことも出来ません。私たちが前からリードして子供は付いてくるものです。1-1は2と答え出る子もいれば5という答えを出す子もいます。大事なのはその子を間違っていると言わず、何故5が出たのかを理解してあげられるようにならないといけません。自分には重い責任があることを強く感じました。

環境センターを見学に行ったらゴミを分別して捨てるということを知りました。日本は自然資源が殆どないので大昔からお持さんたちもリサイクルしていたそうです。また、新修を受け入れて頂いた各所の皆様、そして私達を受け入れて頂き期間中お世話をお願いしたアルティックや蓮華院蓮生寺のスタッフの皆様、さらに、ホームステイを受け入れて頂いたホストファミリーの皆様にも心より厚く御礼申し上げます。

さて、私はアルティックがミャンマー国のイラワジ管区で行う学校建設に約6年間関わってきました。アルティックは81校の学校を建設し、人々の意識も変えまして。昨年からアルティックとイラワジ管区教育事務所は人材育成研修をスタートさせ、イラワジ管区全タウンシップの先生をより良い教師にするプログラムをはじめました。研修は2ヶ月に1回行われ、既に6回の研修を終えました。この研修は非常に生産的で、研修に参加した先生の殆どが大きな変化と成長を遂げています。今後のミャンマーの教育のためにも役に立っていると感じています。

今回の日本での研修は私達教師にとっても非常に有効な役に立つものばかりでした。特に日本の教育システムや地方行政や生徒の親達がどのように教育を支援し、協力しているかを知ることが出来ました。私達は梁山小学校と有明中学校を訪問する機会を得ました。教える方は私の国とは全く違いました。学校の設備はとも素晴らしく、政府からの支援も信じられないほど行き届いていました。日本の教育は全く素晴らしいものでした。

それから、九州看護福祉大学にも行き、先生や生徒たちと異文化交流も行ってました。1,500人の学生に対し、60,000冊の本を有する図書館がありました。すべての本はコンピューターで貸出をコントロールされていました。日本はとも進んだ国で全てをコンピューターで管理していました。コンピューターを使うと仕事も簡単に早く出来る事が分かりました。本は使う人のことを考えてとても整然と整理されていました。ミャンマーでは、本の貸出をコンピューターで行っているところはなく、日本のITがどんなに進んで

開紙からは本や床の材料、牛乳パック6枚からティッシュ4枚、10個の缶コーヒーから500グラムの鉄ペットボトルからカーペットなどを再プロデュースすることが出来ることとです。全国どの町の町にもリサイクル活動があって自分の街が奇麗になるように皆参加しているのがわかりました。

農業の技術についても色々勉強しました。最近では、異常な気象状況が多いので温室で耕すのはとても安定しています。私の知識では温室栽培は環境に悪い効果があると聞いたことがあってミャンマーでは自然に耕します。しかし、一概にそうではないことを知りました。世界規模の工場を見学しました。面積が9マイルにも及ぶ広大な敷地の造船所は10ヶ月で大型タンカーを10隻も造れるほど広いものでした。

この8日間の研修から色々な知識や経験を沢山学びました。日本の教育を視察して思ったのは、私達教師は子供を成長するように教えるためには、まず自分が成長する必要があると思います。理想の教師になるには生徒より本をもっと読まなければならないです。子供たちが良くなるため教えることは十分可能なのに、それが出来ていなかったことを本当に後悔しています。今後は生徒に優しく接し、生徒の気持ち分かる教師になるように頑張りたいです。もうこのような悔しい思いをしなくていいです。子供の可能性はいつもそばにいます。私達、先生の責任だと改めて感じました。

時間に緩かった私は、今その価値を知ることができ、自分でどうやって前を進むべきか、プランを書けるようになりまして。日本とミャンマーの違いを学んで、自分の国で子供が憧れるような先生になれることを誇りに思っています。

ミャンマーの教育の未来、子供たちの将来が良くなるために先生が重要な役割を担っていることを理解しました。クラスの中で子供たちの考えや思いを書かせることも勉強に効果があると思います。最後に、私1人ではミャンマー国全体を変えることは出来ませんが、同期の皆と力を合わせ、時間をかけて一杯頑張りたいと思います。

いるかを体験しました。リサイクル施設にも行きました。ゴミは細かく分別して捨てられ、もう一度衣類や鉛筆、色々の資材に加工されていました。私達が責任者の方の説明を聞いていた時スタッフの方はコンピューターを使って一生懸命に作業を進められていました。また、くじを引いて家具や自転車などを他の人に上げたり、古着を売りたい人に送るユース・プログラムもありました。これを見て日本人は自分のことだけではなく、いつも他の人のことを思いやる気持ちがあることを知り大変勉強になりました。

造船所も視察させて頂きました。見たこともないような大きな船が作られていて、責任者の方が工程ごとに丁寧に説明をして頂きました。そこには2,000人のワーカーが働いており、フィリピン人など外国人も沢山いるということでした。一度に何千人もの人が作業を分担して協力して船を作り上げる。私の国がこのような仕事を出来るようになるのはかなり先のことだろうなと感じ、自分たちはもっと努力しなければならぬことを痛感しました。

元教育長の森先生に自分の経験に基づいた教師の心構えについて講義を頂いたことは若い教師達にとってまたと無い貴重な経験になりました。私は若い先生方に自分の学校に帰ったら、「森先生のように先生の見本になれるように頑張らなさい。」と激励しました。私も小学校の先生からはじめましたので、森先生と同じ気持ちです。私は定年後も我が国の教育の発展に力を注ぎたいと思います。

最後に私は日本で沢山の価値ある経験を積み重ねて頂きました。もうすぐ定年ですが、引き続きアルティックのプロジェクトを支えていきます。私の後輩の教師達も日本でも多くのことを学ばせて頂きました。この経験が私達の国の教育の発展に役に立つことを希望しています。アルティックと日本の皆様にはイラワジ管区に沢山の学校を建設して頂きましたことを心より感謝申し上げます。次は皆様もミャンマーに来られることをお待ち致しております。

チベットその苦難の歴史

当会ではチベット難民支援を開始して20年以上になります。この度はあらためて、国を追われたチベットの人々の苦難の歴史をお伝えしたいと思います。

1 法王の脱出

1959年3月10日、数万のチベットの民衆がダライ・ラマ法王のいるノルブリンカ宮殿(在日現チベット自治区ラサ市)を取り囲んだ。その日、法王は中共軍司令部(中共「中国共産党」)での演劇に招待されていた。しかも中共側は法王が護衛なしで来ることを要求していたのである。今まで東部チベットで、高僧が中共軍司令官からパーティに招待され、殺害あるいは、投獄されるケースが4回もあった。群衆は、法王を中共軍の手に渡すまいと決意していた。

群衆は何日経っても、宮殿のそばから離れなかった。3月17日、中共軍陣地から発砲された重自砲の砲弾2発が宮殿の近くに落ちた。法王はこのまま宮殿にいれば、中共軍と群衆の対立が増すだけだと考え、国外脱出の決意を固めた。群衆の指導者の協力も得て、法王は一兵卒に変装し、その夜、ひそかに宮殿を脱出した。

2 中共軍「反乱を鎮圧」

法王の脱出に気がつかなかった中共軍は、3月19日午後2時から、宮殿に向け、

一斉に砲撃を開始した。集中砲火は41時間続けられ、宮殿はハチの巣のようになった。3日間で、1万から1万5千人のチベット人が殺された。宮殿の内外は死体で埋め尽くされ、中共軍は法王の死体を探し回った。中共軍は、さらに「反乱を鎮圧」するために、チベット全土に戒厳令を敷き、23日までにラサだけで4000人を逮捕した。中共軍の内部資料によると、10月までに、ラサおよびその周辺地域で8万7千人のチベット人を殺害したという。

3月28日には、中国國務院が周恩来首相の名で、チベット政府の解散と、その職権を「チベット自治区準備委員会」に移すことを発表した。そしてダライ・ラマ法王が「拉致」されている間、パンチェン・ラマを準備委員会主任代行に任命した。しかし、このパンチェン・ラマは、中国の傀儡にはならず、89年には「チベットは中国から得たものよりも、失ったものの方が大きい」という歴史的な声明を発表し、そのわずか4日後、謎めいた不慮の死を遂げた。

3 収奪された国土

第二次大戦後、アジアやアフリカの民族が次々と独立していく中で、唯一チベット民族はこうして、植民地に転落した。

チベットは本来、ヨーロッパ共同体に匹敵する広大な領土を持っていたが、その東部は分割されて、四川省、雲南省、

甘肅省などに編入された。北部のアムド地区は青海省とされた。その結果、現在残るチベット自治区の面積は、以前の約半分にすぎない。

また、1949年当時のチベットの森林面積は22万平方kmであったが、中共軍による乱伐で、1985年には13.4万平方kmとほぼ半減した。中共軍は旧国民党系の囚人や、チベット人を使って、原始林へのアクセス道路を切り開き、伐採した木材を中国本土に送っている。

4 生活と文化の破壊

チベット亡命政府は、1949年から79年の30年間に死亡したチベット人は、120万人をくだらないと発表している。その内訳は、拷問17万3千人、死刑15万7千人、戦闘43万3千人、飢餓34万3千人、自殺9千人、傷害致死9万3千人である。侵略以前のチベット人口が600万人なので、5人に一人が殺されたことになる。チベット人の家庭で、家族が一人も投獄、殺害されていない家を見つけないのは難しい。

仏教国家チベットには、6,259もの僧院、尼僧院があったのが、1976年に残っていたのは、わずか8つに過ぎない。

い。仏像や装飾品などは、ことごとく中国本土に持ち去られた。59万人いた僧尼僧などのうち、11万人強が拷問死し、25万人以上が遺俗(げんそく)僧侶から一般人になること)を強制された。

僧院に付随して学校があったのだが、それらも一緒に破壊された。チベットの12歳以上の文盲率は、中国側の発表でも、74.8%であり、中国本土の31.9%の2倍以上となっている。

中国政府は、産児制限や、中絶・不妊手術により、チベット人の人口抑制を図っている。その一方で、中国人の移住を数々の優遇策によって奨励した。その結果、チベット人口600万人に対して、チベット全土に住む中国人は750万人と見積もられている。

チベットは、中国の過剰な人口の捌け口とされ、チベット人は自らの国土においても、少数・劣等民族とされてしまったのである。

※現在チベット難民(チベット自治区を出て生活している人々)はインドの約10万人をはじめとして、世界中に134,000人を数えます。

この文章はホームページ「国際派日本人養成講座」より引用したものです。この講座には、学校では教わらない真実の日本史や知らなかった日本の偉人伝が満載です。ご家庭や学校で利用できるものが多数掲載されているお薦めのサイトです。
<http://blog.jog-net.jp/>
編集・発行/伊勢雅臣氏

当会のチベット難民への支援事業を紹介します。(インド国内の難民居留地にて)

① 家屋改修事業

建築から約50年以上経つ家屋は老朽化し、不衛生で結核などの病気の原因になります。また、蛇や毒虫などの侵入を許し、被害にあうこともありました。そもそも屋根、壁が崩れかけている家屋もあります。そんな家屋の改修を行いました(ノルゲリン居留地、カムラオ居留地にて約200棟)

② 飲み水支援

少子高齢化が進むチベット難民居留地で窮しているのが飲み水の確保です。当会ではサトゥン居留地に於いて、給水設備を建設しました。居留地から1.5キロ離れた水源にポンプ小屋を作り、さらに給水塔を建設し、そこから各家



Before



After

およそ80箇所の子供やチベット人の学校などに配布しています。これまで18年間で55種類、約17万冊を出版しました。



なったばかりではなく、これまでの「水汲み場まで行き、順番を待って、重い水タンクを持ち帰る」という大変な労働から解放されることとなりました。

③ チベット語書籍出版

チベットの文化、伝統、歴史を伝えるべく書籍の出版を行なっています。チベット難民社会では生活様式や社会環境の変化により、伝統、文化が薄れつつあります。このままでは、先人の知恵や道徳が消滅し、チベット人のみならず、人類の大きな損失となります。この出版事業では毎年3〜4種類の書籍を出版し、インド、ネパール、ブータンにある



④ 文化事業支援

③と同様の理由で伝統文化を守るために、チベットの伝統舞踊や音楽の継承を支える事業を行っています。サトゥン居留地において青年会の主導のもと、民族衣装を作成し、民族楽器類をそろえ、さらに指導者を招いて、活発に練習が行われています。この活動のお陰で、コミュニティに活力が生まれ、さらに結束も徐々に深まっています。



⑤ 寄宿学校「チヨウンタラ校」支援

チベット難民の学校チヨウンタラ校はほぼ全寮制の学校で、「トゥティン」という約2,000キロ離れた貧しい僻地から来た子供たちが学んでいます(約300人の生徒が修学しています)。



ており、その内容は、民族楽器や民族衣装の充実、低学年層のための遊具施設の改修、グラウンド整備、給水設備の改修などを行って来ました。教育環境の充実を図ることで、未来を志向する人材の育成の一助になることと確信しています。

⑥ 帰省事業支援

帰省事業とは夏休みを使って児童、学生を故郷に返す事業です(ローテーションにて3年に一度)。この事業の目的は多感な時期に家族と疎遠になるといって、精神衛生上悪影響を及ぼすことを無くすためです。さらに、田舎の親御さん達は当初何千キロも離れた学校に、我が子を修学させる必要性をあまり感じていませんでしたが、帰省した子供たちが学校の様子や学んだことを親や地域の村人に教えることで、教育を受けていない村人達は大変なカルチャーショックを受けることとなりました。

